

(1) 信濃国更級郡六ヶ郷用水の開削について

—坂城町上五明条里水田址の発掘調査成果から—

小出晨生

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターでは、国道18号線バイパス改築工事に伴い坂城町上五明条里水田址（以下、上五明と表記）の発掘調査を令和3年度から実施している。これまでの調査で、上五明の土地利用・集落形態は現在の景観と大きく異なることが明らかになった¹⁾。奈良時代の水田は千曲川が形成した旧河道の窪地地形内に造成され、その上層では平安時代中期の散居集落が検出されている。

千曲川左岸には「六ヶ郷用水」と呼称された全長約8.7キロの農業用水が存在する。現在、上五明及び力石条里遺跡を灌漑しているのはこの用水である。用水は上田市半過で千曲川から取水され、左岸に位置する網掛・上平・五明・力石・新山・

上山田の水田域を灌漑している。

用水の開削は『倭名抄』に記載された古代の村上郷まで遡るといわれる（坂城町1981）。しかし、六ヶ郷用水と比定できる用水路の存在は発掘調査で確認されていない。さらに、窪地地形の古代水田は西側谷の沢水を灌漑に利用していたことがわかっている²⁾。また、水田層を被覆する砂層も沢から供給されたとみられる。そもそも平安中期集落は六ヶ郷用水が灌漑する水田域の下層に広がる。以上のことから六ヶ郷用水は古代に存在しなかった。

本稿では、発掘調査成果に基づいて六ヶ郷用水の開削について検討する。また、中世に水田開発を主導した領主層の動向についても触れたい。

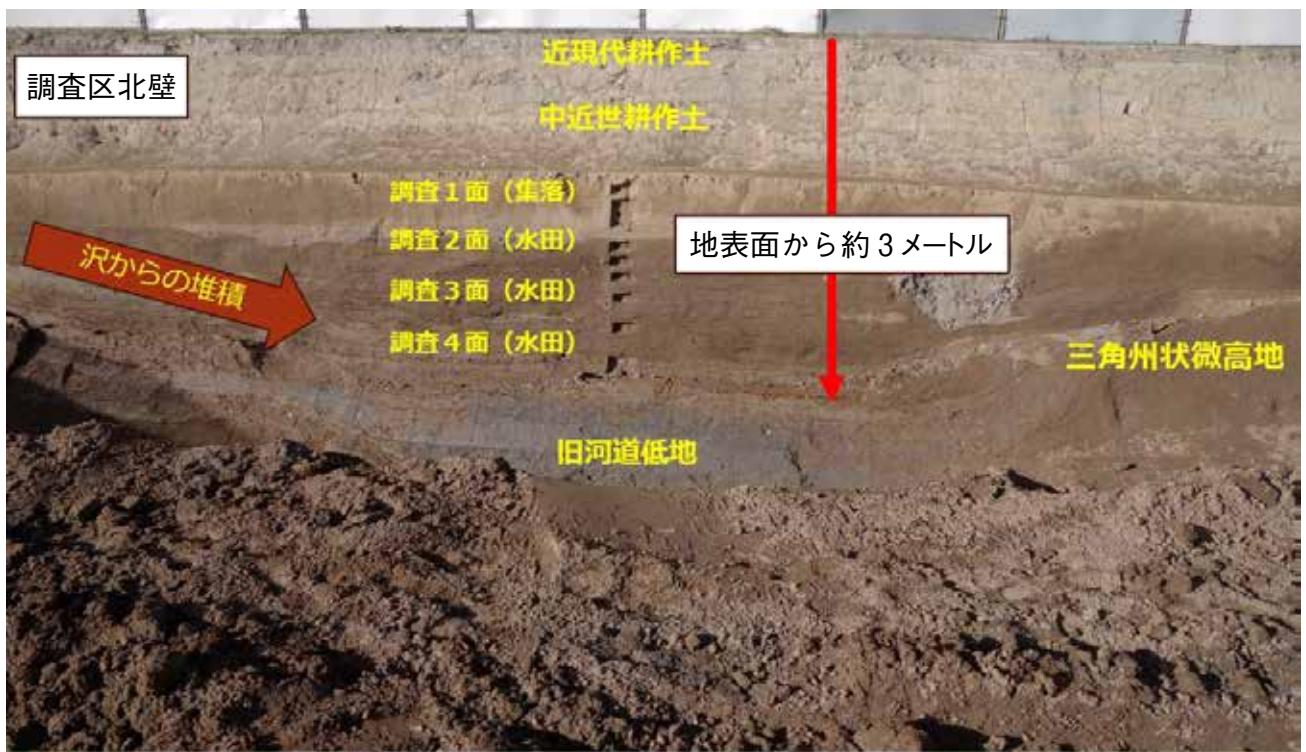


図1 本年度調査における土地利用の変遷



図2 土層断面の内耳鍋

2 旧地形の変遷と用水形態

西側谷の出浦沢・福沢川が土砂を押し出す力は強く、奈良時代の水田や窪地地形は沢の堆積によって埋もれた。沢の堆積の激しさは、本年度調査区の最深部にあたる調査4面が現地表面から約3メートルの位置にあることから明確である（図1）。

平安中期には地形が平坦化して調査1面の散居集落が成立した。集落の廃絶後、上層の水田耕作土で中世後期とみられる内耳鍋が出土した（図

2）。遅くとも中世後期には再び集落域が水田化され、水田は現在まで踏襲されている。こうした沢の堆積土によって、中世以降には氾濫原の地形は南東から北東に傾斜していった。

現在、千曲川左岸の水田域を灌漑する六ヶ郷用水は、沢の堆積が形成した扇状地と千曲川氾濫原の間を縫うように開削されている。この状況から、用水は地形が南東から北東へ傾斜する地形になった後、平坦になった千曲川氾濫原を水田開発するため開削されたことがわかる（図3）。

小穴喜一氏は用水路の形態から、縦水系の沢水・小河川による灌漑を「単線型水路」、横水系の大中河川による灌漑を「横断型水路」と定義し、前者の開発が後者に先行することを明らかにした（小穴1987）。これに従えば、西側谷の沢は単線型水路、六ヶ郷用水は横断型水路に位置づけられる。

現在、西側谷を流れる沢と六ヶ郷用水は立体交差しており、合流していない（図4）。これは、用水の開削及び水利権が別個に成立したことを示している。さらに、年代が古いはずの西側谷の沢



図3 六ヶ郷用水と現地形（地理院タイルに加筆）



図4 六ヶ郷用水・福沢川の立体交差地点



図5 天井川化した出浦沢

は六ヶ郷用水の上部で通過している。それは土砂の押し出しによって天井川化したことが原因であり、沢の下を用水が流れているからといって六ヶ郷用水の開削が沢の灌漑に先行するわけではない（図5）。

3 中世の開発勢力

中世の上五明を含む千曲川左岸には、伊勢社領「村上御厨」が置かれていた。中世信濃の用水開発について、村上御厨と同じ千曲川流域に位置する信濃国大田荘の水利調査を行った福嶋紀子の研究成果がある。氏は、沢水を水源とする谷田開発が先行し、後に横断型水路による沖積地の大規模開発が行われたことを指摘した（福嶋1994）。これは上五明の発掘調査で明らかになった開発プロセスと共通する。大田荘において、沖積地を灌漑する横断型水路の開発は、荘内郷村の地頭職を有

する金沢称名寺や島津氏が主導したとみられる。

一方、村上御厨の開発を在地で主導したのは村上御厨を本拠地とした信濃村上氏であったと考えられる。村上氏一門の中には、出浦沢・福沢川の流れる西側谷の扇状地を名字の地とした出浦氏・小野沢氏がいる（花岡2013）³⁾。出浦氏は承久の乱の勳功によって若狭国に名主職を得ており、西遷した一族もいた。また、小野沢氏は得宗被官としての活動が確認されている。出浦氏・小野沢氏は村上氏の傍流である故、得宗北条氏に接近することによって勢力を保った。西側谷を本拠地とするこれらの勢力が、千曲川氾濫原の開発を進め水田域を拡大させていったと想定したい。

4 文献史料上の六ヶ郷用水

六ヶ郷用水の史料上の初出と考えられるのは、永禄10年（1567）11月19日付の武田信玄朱印状である⁴⁾。「村上庄内其方知行分之堰役・上役、合四拾三俵御赦免候畢」とあり、信玄は家臣の大須賀久兵衛尉に対して村上庄内の「堰役」四三俵を免除した。村上御厨は16世紀に「村上庄」と呼ばれていたことがわかる。中世後期における村上御厨の伝来は不明であるが、「村上庄」という表記は16世紀には伊勢社領としての実態を失っていたことを示している。天正19年（1591）の上杉景勝による村上庄内新山村検地でも「四拾仁表壹斗三升 堰役」と記されていることから、新山村に対して「堰役」四二俵の負担が定められている⁵⁾。

ところで、『信濃史料』は天正19年の文書に記された「堰役」を「端役」と翻刻しているが、本稿では『坂城町誌』『日本歴史地名大系』に従い「堰役」と解釈したい⁶⁾。また、文書に花押を据えている「賢祐」の詳細は先行研究で明らかにされていない⁷⁾。本文書の詳細な検討は今後の課題である。

近世に入ると用水を管理する「六ヶ村組合」が成立する。近世文書から、網掛・上平・五明・力石・新山・上山田の六ヶ村による用水の共同管理が行われた様子を窺うことができる（坂城町1981）。

5 おわりに

これまでの発掘調査によって、千曲川左岸における土地利用の変遷を捉えることが出来た。六ヶ郷用水の開削は古代まで遡らない。千曲川左岸の水田は、西側谷の沢水を取水源とした開発が先行していた。中世以降、地形の平坦化に伴って氾濫原の水田化という土地利用上の転換が進んだ。水田開発を推進した勢力として信濃村上氏の存在を想定した。しかし、史料上で六ヶ郷用水の存在を確認出来るのは16世紀末であり、用水の開削と領主層の関わりを具体的に明らかにすることは難しい。また千曲川のような大河を取水源とする用水路の形態はそれほど古いものではないだろう。本稿では課題の提示に終始してしまったが今後の発掘調査成果が更なる実態解明の手掛かりになることを期待したい。

筆者の力量不足でまとまりのない文章になってしまった。想像の域を出ない記述も多く、史料や報告書の誤読・誤解もあるのではないかと思う。

ご批判を仰ぎたい。

註

- 1) 調査の概要是本誌掲載の市川隆之「上五明条里水田址」を参照。
- 2) 市川隆之氏の教示による。
- 3) 出浦・小野沢は坂城町上平の小字名として残る。
- 4) 『信濃史料』第13巻192頁。武蔵国に出自を持つ大須賀氏は、村上氏に従い明応年間ごろ村上御厨（村上庄）に住み始めた。武田晴信による村上義清攻略の際に武田方となった。
- 5) 某黒印状『信濃史料』第17巻442頁。
- 6) 本来であれば原文書を調査する必要がある。時間の都合上困難であった。
- 7) 賢祐は上杉家中の人物と考えられるが、豊臣期に上杉景勝が信濃国更級郡で行った検地は先行研究で文禄4年（1595）の事例しか取り上げられていない（平井2014）。

参考文献

『日本歴史地名大系』第20巻長野県の地名、平凡社、1979年
『坂城町誌』中巻歴史編1、1981年
『長野県史』歴史編第3巻中世2、1987年
小穴喜一『土と水から歴史を探る—古代・中世の用水路を軸として—』信毎書籍出版センター、1987年
『角川日本地名大辞典』第20巻長野県、角川書店、1990年

『長野県姓氏歴史人物大辞典』角川書店、1996年

福嶋紀子「信濃国太田莊石村郷の歴史的景観と水利」同著
『中世後期の在地社会と莊園制』同成社、2011年、初出
1994年

『主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書2—坂城町内一上五明条里水田址』長野県埋蔵文化財センター、2011年

花岡康隆「鎌倉期信濃村上氏についての基礎的考察」『法政史学』第79巻、2013年

平井上総「豊臣期検地一覧（稿）」『北海道大学文学研究科紀要』第144巻、2014年